



物語を生きる

In Your Own Story

永田円了

物語とは、目に写る風景であり、布に描かれた模様であり、希望である。

自分の人生に物語が生まれる時、それは立ち上がる出来事そのものによってではなく、その出来事に立ち向かう意識によって誕生するものである。布地というなら、出来事は縦糸、それを受け止める意識が横糸ということになる。この横糸と縦糸によって布がつくられ、そこに織り込まれる模様は、横糸（意識）によって千差万別なものになる。

物語を生きるとは、自分独自の模様、え！こんな図柄があったのか！という布を織ることである。

また、**物語を生きるとは、**意外性を生きるということでもある。

「梅檀は双葉より芳し」式の天才伝説は物語にならない。何故なら、そこには意外性がないからである。

不登校児であり、小学校を中退した子がエジソンであったとは、5歳までコトバを話さず、15歳で中学校を中退した生徒がアインシュタインであったとは、また小学校4年生で中退、身体が弱く、金もなく、でもその人は松下幸之助であったとは、え！と、ビックリする事実である。

これこそが、物語を生きたと、ということであろう。普通だったら考えられないような逆境に新しい可能性を観る、この意識が物語に生命を吹き込む。



物語を生きるとは、物事を象徴的に捉えることである。象徴的に捉えるとは、出来事に意味を見つけることである。

その逆に、象徴的に物事を捉えないとは、出来事を額面通りにしかとらえないこと、例えば、悲しいことは、ただ悲しいことであり、嘆き悲しむことに明け暮れる。

これを象徴的に捉えるなら、こんなことが今起こることには何か意味があるに違いない。今が試練の時だ。これを乗り越えれば、自分が成長する、というように、悲しい出来事が物語が成就するプロセスとしてとらえること、これが象徴意識である。



こんな話がある。ある時某小説家が地下鉄に乗った。車両は空いていて、前の座席には父親らしき男性と、3歳ぐらいと5歳ぐらいの男の子が座っていた。

そのうちに子ども達が座席の上で遊び始めた。靴も脱がずに座席の上でジャンプを始めた。また一人の子は、車両内をまるで運動会のように走り始めた。

小説家はよっぽど注意をしようと思ったが、父親がいるので控えた。でも降りる駅が近づいてきたので、思い切って、父親らしき男性に、子供をちゃんと躡けなさい、と注意をした。男性はビックリしたように顔を上げて、そのことに初めて気づいたようにいった。

「あ、すみません。今女房が病院で息を引き取り、これからこの子供たちとアパートでどう暮らしているのかが考えていて、子たちが騒いでいることには気づきませんでした。申し訳ありませんでした」と丁寧に謝ったという。

それぞれの出来事には、何か物語があるものである。自分のみならず、他者の物語に耳を澄ませることができれば、人と人との関係が深いところで結びあえるのであろうと思う。

<事例>

美空ひばり「悲しい酒」 泣いて、怨んで、夜が更ける
NHKドラマ「八日目の蝉」 蝉の7日間 感謝でいっぱい
シャーリー・マクレーン / 悪者から学ぶ
三島由紀夫 / 終戦、生と死、何かのために生きる
小野田寛郎 / ルパンでの29年、ブラジルでの30年
歌「デスペラード」 イーグルス、ドン・ヘンリー

